津久見市の小児医療・小児保健の向上を目指して

子どもの健康と病気の予防⑫

― 生後６か月以上５歳未満の小児への新型コロナワクチン接種 ―

小宅医院　小　宅　民　子

新型コロナウイルス感染症は、第８波に突入しました。感染者の急増に伴い、子どもの感染者も増加し、それに応じ重症化する子どもも増えました。日本小児科学会・日本小児科医会は、メリット（発症予防、重症化予防等）がデメリット（副反応等）を上回ると判断し、２０２２年11月、「生後６か月以上５歳未満のすべての小児への新型コロナワクチン接種を推奨する」方針を提示しました。

オミクロン株流行以降は子ども同士で感染する機会が増加しています。２０２２年１月以降は10歳未満の感染者数は約10～20％、10歳代を含めると30％程度となっています。これに伴い保育施設、学級、学校閉鎖の数も増加しています。

子どもの感染者数の急増に伴い、重症例と死亡例が増加しています。オミクロン株流行以降はクループ症候群、熱性けいれんの合併が増え、脳症や心筋炎などの重症例も報告されています。また、10歳未満、10歳代の死亡報告も増えています。

生後６か月以上５歳未満の子どものワクチンの発症予防効果は、生後６か月～２歳児未満で約75％、２～４歳児で約70％と報告されています。さらに重症化予防効果は発症予防効果を上回るといわれています。

接種できるワクチンはファイザー社製で３回接種します。主な副反応は、接種部位の痛み、発熱、頭痛、悪寒、倦怠感等で、ほとんどが軽症または中等症で短期間でした。

健康な子どもへのワクチン接種には、メリット、デメリットを保護者が十分理解することが重要です。実際に接種する際には接種前・中・後のきめ細やかな対応が必要です。ワクチン接種に不安や疑問がある場合は、かかりつけ医や健康推進課にご相談ください。

生後６か月以上５歳未満の小児への新型コロナワクチン接種５つのポイント

- オミクロン株流行以降は子どもの感染者が急増
- 感染者増加に伴い重症例や死亡例も増加
- ワクチンによる発症予防や重症化予防効果が報告されている
- 副反応は接種部位の痛み、発熱、頭痛など
- 生後６か月以上５歳未満のすべての小児への新型コロナワクチン接種が推奨された